（別紙様式）

令和５年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

鎌倉市立御成小学校

研究テーマ：「話を聴き、深く考え表現する子」
～子どもの「聴く姿」を引き出すような総合・生活の単元構想～

１　実践の目的

【研究仮説】

① 友だちの意見や様々な人の話を聴く
② 聴いたことを自分の考えと比較したり取り入れたりすることで、深く考える、考えを広げる
③ 考えたことを伝える、表現する

このような「聴く」「考える」「表現する」の繰り返しによって、聴く力、深く考える力が育つであろうと考えた。

【研究の経過】

〔２０２１年度〕

教科指定無しだが、生活・総合が中心。

成果

・「めざす姿 系統表」の作成と共通理解
・「生活、総合」の単元構想図、総合の全体計画の見直し

課題

・十分に子どもの「聴く力」が育ったとは言えない。研究仮説を見直し、アプローチの方法を変えていく必要がある。
・聴き方の「形」の指導になっていたのではないか。もっと子どもが聴きたくなる、表現したくなるような環境を作ることを考え、授業を工夫していく。子どもが主体的に取り組むための教材研究・授業研究が必要である。

〔２０２２年度〕

・テーマに迫るための、あらゆる教科で授業の工夫、授業改善
・相手意識・目的意識をもった「聴く、考える、表現する」の活動
・子どもたちをファシリテートするような授業の工夫
・学年会Ａの活用（教材研究→授業の見合い→振り返り）

成果

・研究の中心を「聴く」に焦点化したことで、授業を見る視点や協議会の話し合う視点がより明確になった。

課題

・それぞれの場面での「聴く姿」とはどんな姿なのか、教員での共通認識が必要だと感じた。低中高でめざす姿をより具体化していく必要がある。

２　実践の内容

〔２０２３年度の進め方〕

・授業は「生活、総合」。今までの日々の授業改善によって育った（育てている）子どもの姿を見せ合う。
・「聴く」については、教員で共通認識をもち、すべての教科で育てていく。

（１）校内研究の体制

研究部９名（うち、研究推進メンバー３名）を中心に、研究の全体計画・提案をしてきた。今年度は、鎌倉市課題指定研究の発表があることから、日頃から学年内のこと、授業のことを話せる環境をつくってきた。

授業研究のふり返りも、講師の早稲田大学教育・総合科学学術院小林宏己教授と授

業学年が話す時間を確保することで、授業の具体的な話をしたり、学年で聞きたいことが聞けたりするなど、研究をより主体的に深められるようにした。

（２）校内研修会の様子

校内研究の場と関連付けて、御成中学校ブロックの３校の教員が一堂に集まり、山梨大学大学院総合研究部教育学域の茅野政徳准教授から「児童・生徒の『学びに向かう力』の醸成」の講義をいただいた。これは、中学校では卒業後に進路が待ち構えているため、「主体性」についてお話を伺いたいとの希望が昨年度あったことと関連している。本校としても、「自分の意見を伝えたい」子が多く見られる中で、授業者がそれをどのように見取り、評価していくのかということが話題に挙がっていた。同じ中学校ブロックの３校で同じ話を伺えたことで、めざす子どもの姿をすり合わせたり、小中それぞれでの現状を伝え合ったりする機会となった。

（３）研究授業、研究協議の様子

早稲田大学教育・総合科学学術院小林宏己教授を講師としてお招きし、年３回の授業研究および協議会を行った。

今年度は特に「聴く」ことに焦点化し、次のような視点で授業を見ることにした。①本時でめざしていた「聴く姿」は見られたのか、②見られたとしたら、それはどのような手立てが有効だったからなのか、③見られなかったとしたら、その原因は何か、他のどんな手立てが有効だと考えられるか、の３点である。

協議会では、授業内で見られた課題や改善点を中心に協議を行った。出てきた課題を、この１時間の授業の中の課題としてだけではなく、「授業をする上での共通の課題」としてとらえ、その解決策を小グループで具体的に考えていくようにした。

３　実践の成果

研究を積み重ねることで、児童の「聴く力」は以前に比べ育ってきたと感じる。少なくとも、児童の「聴こうとする姿勢」は、それぞれの学年、発達段階に応じて見られるようになってきた。こうした成果の要因は、教員側の意識の高まりによるところが大きい。特に、研究の中心を「聴く」ということに焦点化したことが非常に有効であった。これにより、「めざすべき子どもの具体的な姿を全員で共有することができた」「どうすれば聴くことができるようになるかを考えることで、研究内容がより具体的になった」「『聴くことができているか』という一貫した視点で、児童の実態把握や授業の振り返りができた」「教員側も子どもの話を『聴く』という意識が高まり、子どもの声やつぶやきを拾えるようになった」などの効果があった。「研究の焦点化」は、今後どのような研究でも有効であると考えられる。

４　今後の展開

これまでの研究を今後につなげていくためには、「各学年で育ててきた力を、どう次の学年に引き継いでいくか」を考えていく必要がある。年度が変わり、学年が新しくなると、担任も変わる。４月になった時に、新学年・新クラスでゼロからスタートでは、６年間での十分な積み重ねができない。子どもの力がどの程度伸びたのか、どんなところが課題なのかを分析・把握し、しっかりと引き継げるような仕組みを整える必要がある。教員間のコミュニケーションを密にして、今後も学校全体で子どもの「聴く力」を育てていきたいと考えている。